様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５９２２２７
研究課題名（和文）　ヒロシマ原爆被爆時における看護体験が及ぼしたその後の人生への影響
研究課題名（英文）　The effects on the lives of nurses as a result of their experiences of nursing A-bomb survivors in Hiroshima,1945

研究代表者
中信　利恵子（NAKANOBU　RIEKO）
日本赤十字広島看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：４０３４１２４２

研究成果の概要：ヒロシマ原爆被爆時の看護体験が、その後の人生にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的とし、当時看護を行った赤十字看護婦及び看護婦生徒にライフヒストリー法による面接調査を行った。看護婦養成所での授業は中断し、悲惨な状態の人々に無我夢中で看護した。被爆後、結婚、出産、配偶者との死別、定年まで看護職として勤務するなど女性としてのライフコースを歩んだ。被爆後に病気や辛い出来事に直面した時、被爆時の看護体験を礎にして乗り越えた。生かされた自分自身は人の役に立って生きることだと意味づけていた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,000,000	0	1,000,000
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,500,000	450,000	3,950,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：看護学、ヒロシマ原爆、人生への影響、災害看護、看護体験、ライフヒストリー、質的研究、放射線被曝

１．研究開始当初の背景
(1)平成 14 年度から平成 16 年度にかけて、ヒロシマ原爆被爆時の看護体験の実相について研究的に取り組んできた。

(2) ヒロシマ原爆被爆時の看護体験の実相の研究の成果から、当時の被爆者への看護体験が、対象者のその後の人生に極めて大きな影響を与えていることを強く感じ、同時に原爆被爆という惨事下における看護体験がその人の持つ死生観を変容させると考えた。

(3)原爆被爆が健康に与える影響については、組織的、継続的な研究がなされ成果をあげている。しかし看護師がどのような役割を果たしたのか、どのような体験をしたのか等、看護の視点から学問的な追及がなされたことはなかった。

(4)人類史上例のないヒロシマ原爆被爆時の看護体験者が、自己の体験を語ることによって、その人が今日まで心の中に沈殿させてきた思いや感情、その後の人生に影響を与え続

けてきたもの、その人の持つ死生観を明らかにできる。

(5)災害時の看護体験が半世紀に渡る人生に与えた影響は、本研究で対象とする研究対象者であるからこそ明らかにできる。

(6)本研究で明らかにしようとすることは、放射線被曝の看護のみならず、予想できない事態、すなわち有事や災害の際の看護を考える上でも貴重な資料となる。

(7)原爆被爆直後から数年にかけて繰り広げられた看護には、「看護の本質」に通じる精神や態度といったものがあると予測され、単に後世への継承にとどまらず、現代の看護に一石を投ずるものとなる。

(8)原爆被爆時に看護を体験した対象者の人生や死生観を明らかにすることは、災害時に看護を体験した看護者の支援方法を考えるための基礎資料になり得る。

２．研究の目的

(1)ヒロシマ原爆被爆時の看護体験、及び被爆後、広島赤十字病院、広島原爆病院で被爆者の看護に携わった対象者の看護体験その後の人生についての体験者の語りから、その後の人生にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

(2)(1)の結果を災害時に看護を体験した看護者の支援方法を考えるための基礎資料とする。

３．研究の方法

(1)研究対象者

昭和 20 年当時、ヒロシマ原爆被爆による被爆者の看護に携わった看護婦及び看護婦生徒で、調査への協力の同意が得られた者 9 名と、当時日本赤十字宮崎支部から委託生として広島赤十字病院に来ていた看護婦生徒 4 名の計 13 名

(2)方法

①半構成的面接法を用いて面接調査を行った。

②個人面接におけるインタビューガイドを作成した。

③面接内容を録音し逐語録を作成し、被爆時の看護体験とその後の人生について、ライフヒストリー法を用いて、質的に分析した。

④倫理的配慮として、対象者に、目的･方法、研究の参加の自由、プライバシーの保護について、文書と口頭で説明し同意書を得た。面接時は体験を語ることによる身体的心理的負担に配慮した。

４．研究成果

(1)研究対象者 13 名がそれぞれ異なるライフヒストリーであった。研究対象者のうち、7 名の結果について以下に述べる。

①A 氏のライフヒストリー

A 氏は、眼疾患のため実家で療養していたが、自ら希望して帰院し救護活動を行った。被爆者にガラス片の除去、チンク油・リバガーゼ等による熱傷処置、傷に湧く蛆の除去、体位変換、看取りを行った。活動時は無感情で何を食べたか記憶にない。

A 氏は、卒業後 3 ヶ月間他院で勤務し、実家に帰り 1 年間会社員として勤務し、20 歳代で結婚、子どもを 2 人出産した。自分の両親・姑・夫が被爆者であり、結婚や出産に心配はなかった。30 歳代で夫が病死し、翌年赤十字病院に再就職し定年まで看護職として働いた。その間貧血の治療を行い、現在は長時間の歩行が困難であるが、孫の世話や家事で忙しく生活している。

A 氏は、被爆者に看護できなかった後悔がある。生かされた自分は人の役に立つ生き方をしなければならない。赤十字の看護教育や被爆時の看護体験を基盤にし、物事をプラスに考え努力する決意をしていた。被爆後の辛い出来事は当時の教育が支えとなり耐えてこられた。今でも同級生と話をするとき、赤十字精神があるから少しのことは耐えられると言い合う。

②B 氏のライフヒストリー

B 氏は、病院で掃除中に被爆、額・手足をガラスで負傷した。防空壕に重症者を探しに行った。同級生を担架に乗せ避難し、病院の消火活動をした。外科医と包帯交換、遺体の移送を行った。数日後知人が帰省を促したが、赤十字の看護学生だからと病院で活動を継続した。無感情であった。

B 氏は、ガラス片による化膿、発熱、脱毛、歯肉出血、下血が続いた。卒業後 1 年間他院に勤務した後、赤十字病院に 32 年間勤務した。その間狭心症、肝臓病、子宮筋腫、メニエル病で何度か入院した。被爆者は結婚しない方がいいと思ったが、縁があって結婚した。現在は一人暮らしである。

B 氏は、被爆時に同級生を救命できなかった後悔がある。赤十字を卒業したことは忘れないと考え、赤十字という誇りのみならず重いものを背負って生活してきた。

③C 氏のライフヒストリー

C 氏は、学生寮内で療養中に被爆、逆立ちの

姿勢のまま寮が倒壊し助け出された。下敷きになって死を意識したが、同僚の歌で生を感じた。外に出られたときは先輩後輩の区別なく共に喜んだ。吐血し手足を負傷した。指示を受けて荷物の運搬、便所の消毒、被爆者の名前を聞いて名札をつけたり、水を飲ませたりした。数日後兄の迎えがあるが、学生寮の生徒の中に消息不明者がおり、見つかるまで帰れず、終戦後に再度の兄の迎えで帰郷した。
C 氏は復学後、看護婦生徒として病院勤務の形で活動した。卒業までの 1 年間、多くの孤児の看護をした。卒後実家に帰り、養護教諭、保健婦として勤務、結婚退職するが、復職して養護教諭を続けた。子どもは 2 人出産した。仕事をしながら、小学校 2 級免許や栄養士免許を取得し、1 人で複数の役割を担い、定年まで勤務した。現在も学校のカウンセリングや生徒指導の協力要請を受け、学校に出向く。養護教諭として勤務した間、手術で 4 か月間入院、今でも活動すると全身の疲労感がある。また、皮膚が剥がれた被爆者を目の当たりにし、そのことを思い出させるストッキングが今でもはけない。夫と二人暮らしである。
C 氏は、多くの孤児を助けられなかった思いがある。赤十字の教育は辛かったが、教育者の在り方を強く意識し、相手を思いやることを学び、その後の人生に影響している。生かされた自分の役割として、同級生の体験を文集にしたり、被爆死した同級生の供養や定期的に同窓会を開くなどして、同級生の中で自らまとめ役をして支え合っている。また、学校の協力要請に応えて出向くなど、他者のために生きるという意味を見出していた。

④D 氏のライフヒストリー
D 氏は、学生寮 1 階で被爆し倒壊した寮の下敷きになった。机の隙間から自力で脱出しそのまま似島に向かった。数日後赤十字病院に帰院し看護を行った。遺体を荼毘にふしたとき、不思議と冷静だった。
D 氏は、卒業後 10 年間赤十字病院で勤務、その間に結婚、30 代で出産のために退職した。その後、診療所で 5 年間勤務、退職して家事に専念した。退職後、子宮がん、尿管がん手術、乳がん手術をした。現在は肝機能の低下で年 2 回検査、足の痛みで正座できない。
D 氏は、被爆時の 1 年間の体験が自分にとって大きいものだったと考える。当時の赤十字教育の忍耐の心や厳しいしつけがその後の人生に役立った。

⑤E 氏のライフヒストリー
E 氏は、学生寮 2 階で被爆し倒壊した寮の下敷きになった。救援の軍人に掘り出してもらい、芋畑で意識を失い痛みで覚醒した時には、病院の中庭だった。右頬、右手背を負傷した。衣服は血糊で固まり、落ちていた白衣を拾って着替えて活動した。
E 氏は、卒後宮崎に帰り保健師として勤務、20 歳代で結婚、退職し、出産。子どもが小学校に就学後、病院に 20 年間勤務し、60 歳の誕生日に退職した。夫を在宅で看病し看取り、現在は娘と暮らす。赤十字奉仕団のボランティア活動を続けて、他者のために活動することに意味を見出していた。
E 氏は、自分のせいで、娘が結婚できないのかと思うことがあった。赤十字の看護婦になることが誉れだった。赤十字の教育や看護体験により、人生においてどんなことでも耐えてこられた。

⑥F 氏のライフヒストリー
F 氏は、被爆時学生寮で意識消失し薄い壁の下敷きになった。自力で這い出し一人きりだった。背部にかすり傷が多数あったが、同僚に比べて傷は少なかった。人より軽傷だったため物の運搬などの役割で活動した。
F 氏は、卒業後、宮崎に帰り、4 年間役場の保健師として勤務、その後 2 年間米軍病院勤務、その後勤務地を変遷しながら自衛隊病院で勤務し 50 歳で定年退職した。その後 15 年間病院勤務、退職後現在まで被爆者団体の活動を継続しており、原爆体験の語り部として 2 度の渡米経験がある。20 代後半で結婚、出産、2 人の子育てをしながら仕事を続けた。出産が心配だったが無事に出産できて嬉しかった。夫は病気で他界した。退職後、脊椎椎弓切除術、外耳道の悪性腫瘍の手術をした。右下肢が坐骨神経痛で正座が困難、糖尿病を患っている。
F 氏は、赤十字での看護体験は自分にとって大きな意味があり、赤十字に行ったからこれまでの人生があると感謝の気持ちがある。生かされた自分として、今も被爆者のために役割を持って生き生きと活動し、自分の生きる意味を見出していた。

⑦G 氏のライフヒストリー
G 氏は、学生寮と病院の間の渡り廊下でクレゾールを取りに行く途中で被爆し、吹き飛ばされた。意識を取り戻し、渡り廊下に積んであった白衣を手で裂いて、負傷者の止血をした。遺体の移送、包帯交換、尿器の交換などを行った。
G 氏は、卒業後検疫所や国立病院に勤務し、20 歳代で結婚、その後小・中学校で約 40 年間養護教諭として勤務し、60 歳前に退職した。その後、心筋梗塞で 2 カ月入院、糖尿病、腰痛、眼瞼の手のむくみなどを患っている。現在は杖歩行をしている。
G 氏は、赤十字の教育を受けて本当によかった、人間性を高めてくれたと意味づけている。また、赤十字の教育で正しい言葉使いや礼儀を身につけた。当時の同級生とは今も仲がよ

い。家族も大切であるが、友達がとても頼りになり、赤十字の同級生が命を分け合い、同じ釜の飯を食べた間柄で格別に頼りになる思いがある。

(2)結論
①ヒロシマ原爆被爆時の看護体験
ヒロシマ原爆により看護婦養成所での授業は中断し、自らも負傷しながら、悲惨な状態の人々に無我夢中で看護した。

②ヒロシマ原爆被爆後、結婚、出産、配偶者との死別、定年まで看護職として勤務するなど女性としてのライフコースを歩んでいた。

③ヒロシマ原爆被爆後に、病気や辛い出来事に直面した時、原爆被爆時の看護体験を礎にして乗り越えた。

④生かされた自分は人の役に立って生きることだと意味づけていた。

⑤被爆死した同級生の供養をしたり、定期的に同窓会を開いたりして、相互に生きる支えとなっていることが見出された。

⑥「命を分け合い、同じ釜の飯を食べた」同級生を頼りにして、60 数年たった今も連絡を取り合い、支え合って生きていることがわかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
Rieko Nakanobu, Misa Kawanishi, Narumi Takiguchi, Keiko Iwakiri, Kikuko Ueda, A Student nurse's treating A-bomb survivors in Hiroshima in 1945,23rd Quadrennial Congress 2005, 2005 年 5 月, 台湾台北市

〔その他〕
(1)ヒロシマ原爆被爆時の医療・看護に関する研究成果の公表および啓発活動

①日本赤十字広島看護大学の大学祭において，ヒロシマ原爆被爆時の看護活動に関する展示会を企画した。内容は，看護活動を行った赤十字看護婦の「語り」を収録したビデオと原爆を題材にしたビデオ絵本の上映，救護活動に焦点を当てた「市民が描いた絵」の展示，広島赤十字病院の原爆被爆時の写真，原爆被爆の体験に関連した図書（絵本を含む）の展示を行った（平成 17 年、平成 18 年、平成 19 年、平成 20 年）。

②日本赤十字広島看護大学で特別講演会の実施のためにアメリカから招いた大学教員に本研究活動について紹介を行った（平成 17 年）。

③日本赤十字広島看護大学における中四国地区赤十字関連施設・看護継続教育研修会において研究成果を公表した（平成 18 年）。

④日本赤十字広島看護大学で放射線被曝者医療に関する研修のため来学したアーカンソー州立大学准教授及びイースト・テネシー小児病院看護師 2 名に本研究活動について紹介した（平成 19 年）。

⑤日本赤十字広島看護大学でタイ赤十字の看護教育者 12 名に本研究活動について紹介した（平成 19 年）。

⑥看護協会が主催する認定看護管理者制度セカンドレベル教育課程で「特別講義 被爆と看護」を行った（平成 19 年、平成 20 年、平成 21 年）。

⑦「ひらめき☆ときめきサイエンス」事業の平成 21 年度プログラムとして、研究の紹介を開催予定である（平成 21 年 8 月）。
ホームページ
http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht21000/ht21181.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
中信　利恵子（NAKANOBU　RIEKO）
日本赤十字広島看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：40341242

(2)研究分担者
川西　美佐（KAWANISHI　MISA）
日本赤十字広島看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80341238
植田　喜久子（UEDA　KIKUKO）
日本赤十字広島看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40253067
廣川　恵子（HIROKAWA　KEIKO）
日本赤十字広島看護大学・看護学部・助手
研究者番号：50446069